

地域研究の手段としてのフィールドワークの意義に関する多分野横断的検討

葉山 茂¹
白石 壮一郎¹
近藤 史¹
新永 悠人¹
松井 歩¹
高島 克史¹
林 彦櫻¹
佐々木 あすか¹
古川 祐貴¹
泉 直亮¹
諏訪 淳一郎²
高橋 憲人³
辻本 侑生⁴

はじめに

本プロジェクトは、フィールドワークという、研究における調査プロセスの必要性、可能性を検討することを目的としたものである。2022年度に実施した教育研究プロジェクト「『研究におけるフィールド調査の重要性』に関する多分野横断型研究」を発展させることをねらいとしている。

タイトルに「多分野横断型」と掲げている通り、本プロジェクトに参加するメンバーは生態人類学、文化人類学、民俗学、人文地理学、日本語学、経営学、経営史、歴史学、教育学、博物館学というように多様である。2022年度の研究では、多分野のフィールドワーク実践をメンバーで共有し、フィールドワークという研究行為の特徴を検討した。その結果として、フィールドワークと一口に言っても、ディシプリンごとに想定する形態が異なっていること、そしてどのようなフィールドワークであっても「現地に行く」あるいは「現地と関係性を構築する」ことが欠かせないことなど、各分野の相違点と共通点を共有した。その成果はブックレット『フィールドワークという探索活動の可能性』としてまとめた。

本年度は昨年度の成果を踏まえ、多様なフィールドワークのスタイルを模索し、フィールドワークの課題を検討することを目的として検討を行った。なお、本プロジェクトは研究プロジェクトの体をとっているが、最終的な目標はフィールドワークという手段を用いて、多様な対象、調査方法を学んでもらうためのフィールドワークの教科書の発行をめざすことにある。

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 弘前大学国際連携本部

³ 弘前大学教育学部附属次世代ウェルビーイング研究センター

⁴ 弘前大学地域創生本部

1 背景と目的

人文社会科学のなかでフィールドワークという営みは、研究手法として重要な位置を占めてきた。この場合、フィールドワークとは、何かしらの現場に身を置いて、文字・非文字の情報を収集するプロセスを経験するという意味である。フィールドとの関与の仕方は、分野によって多様であり、何かフィールドワークという手法に必須の条件があるわけではない。ただ、フィールドワークには①現場にすることが強く意識されるプロセス」と②「情報」の取得が意識されるプロセスとがあり、①ではとくに現地にいることやそこでの信頼関係を得ること、現場での人間関係を構築することが意識され、人との関わりは避けては通れない。その意味でフィールドワークは、他者との交渉のプロセスである。

このフィールドワークという営みが、近年になって研究のほか、企業活動や行政調査などでも重視され、活用されている。フィールドワークという言葉自体は市民権を得る一方で、企業活動や行政調査で期待されるフィールドワークと大学の教員や学生が研究や教育を通じて実施するフィールドワークとは、内容やめざす結果が異なっており、フィールドワークという営み自体の意味が共有されているわけではないという事実も明らかになりつつある。

また2020年に始まったCovid19の感染拡大に伴う社会の危機的状況（コロナ禍）のなかで、大学を含むあらゆるフィールドワークを実施できない期間も続いた。三密回避や感染拡大防止という社会的な要請・対応は、密接に関わり現場にいることを求め、場合によっては親密な関係をつくりだすことを目標とするフィールドワークという活動の特質と相容れない関係にあった。そこでフィールドワーカーたちは、フィールドワークを自粛することも多かった。もっとも、コロナ禍に対してはオンラインツールによる映像付きの遠隔通話により、フィールドに行けない状況に対応することも一定程度は可能であった。しかし、そこで問題になったのはフィールドワークという営みが、「情報」にあたるテキストを収集することなのか、あるいはもっと別の目的をもつのかということであった。フィールドワークは人文社会科学にとってどのような意味を持ち得るのかを再検討することが必要になったのである。

上記のような状況から、改めて大学の研究活動におけるフィールドワークという営みの意味を複数分野のフィールドワークの実践を事例として問い直し、その必要性を検討するのがこのプロジェクトの趣旨である。

今年度から始まったプロジェクトは3年計画のプロジェクトであり、以下3つの課題を検討することをめざしている。

①フィールドワークの広がり

新たに日本史、美術教育論、民俗学、生態人類学の研究者を加え、それぞれのフィールド経験を記述することで、フィールドワークの広がりをより精緻に確認する。

②双方向性のフィールドワークの検討

教員・学生が参加するフィールドワーク等を取り上げ、地域住民等とのアクション・リサーチ、パブリック・ヒストリーの視点を取り入れた実践例を積み上げることで現場での知の形成過程について検証する。

③学史的側面の検討

フィールドワークを採用したディシプリンの初発の問い・視点を検討するために先人へのインタビュー等を行い、そのインタビューの映像記録化をめざす。

2 実施内容

上記に示した3つの課題について、本年度、これまでに中心的に取り組んだのは、②の「双方向性のフィールドワークの検討」と③の「学史的側面の検討」である。これまでに3回の研究会と地域未来創生

センターフォーラムのプラットフォームを活用したフォーラム「市民協業時代における大学的フィールドワークの可能性」を開催したが、そのなかで中心的な話題となったのは②の「双方向性のフィールドワークの検討」であった。以下では、②と③の成果を中心に報告し、今後の予定について触れる。

(1) 双方向性のフィールドワークの検討

昨年度の検討のなかで中心となったのは、大学の研究者や学生がおこなってきたトラディショナルなフィールドワークの姿であった。つまり大学の研究者や学生が自分の知りたいテーマをもってフィールドに赴き、そこでインタビューや参与、観察、熟覧、探索などの方法を用いて調査をする営みである。この調査スタイルで特徴的なことは、調査地での被調査者との信頼関係の構築など、現地での被調査者との交流は前提としつつ、調査者は調査者の欲しいデータを被調査者から提供してもらおうという点にある。多くのフィールドワークは、大なり小なり調査者による被調査者に対する搾取という側面をもってきたし、学史的には「調査地被害」という観点も示されてきた。

上記のようないわば「搾取型」のフィールドワークのあり方に対する疑念から、多様な立場の人びとが関わり合い、双方向性にコミュニケーションすることによって構成されるフィールドワークのあり方を検討することが、ここでのテーマである。この現代に要求されるフィールドワークのスタイルを仮に「双方向性コミュニケーション型」のフィールドワークとする。

現代は高学歴社会を迎え、フィールドで被調査者になる人びとの多くが高等教育を受けるようになった時代である。またインターネットの普及等もあり、多くの人びとが容易に社会に対して発言や考え、主張を届けることができるようになり、SNS等を通じた双方向性のコミュニケーションも可能になりつつある。こうした社会状況のなかでは、誰かが専門的な知識を独占したり、一方的に情報をコントロールしたり、合意のない「物語」を構築したりすることは困難になり、「双方向性コミュニケーション型」のフィールドワークが求められるようになってきている。

今年度で開催した研究会では、この「双方向性コミュニケーション型」のフィールドワークの具体的な例として、企業型フィールドワークと大学のフィールドワークの差異や共通点（辻本侑生）、津軽塗を通じた当事者や公共研究機関、大学による協業の試み（近藤史）、資料館展示制作を通じた展示室という大学と住民との双方向性のフィールドワークの場の創出（葉山茂）について取り上げた。辻本はフィールドワークの限界に関する観点を示しつつ、企業と大学のフィールドワークの差異について検討し、大学の側が企業的なフィールドワークに接近する方法について報告している。また近藤は津軽塗の一義的な当事者である塗師と公共研究機関、大学の教員・学生がともに調査の場に立ち会うことによって、相互に創出される新たな知見の可能性について報告している。葉山は野辺地町立歴史民俗資料館の展示制作を通じて学生が野辺地町の住民への聞き取りや住民の活動の観察、住民たちが開催するイベントへの立ち会いなどを通じて、互いに知識を共有し、また展示制作の現場で教え、教えられる住民と学生・教員の双方向性のやりとりを報告し、展示制作が双方向性のコミュニケーションを伴うフィールドワークの場を形成していく過程を考察している。

これらの検討の成果は2023年12月16日に開催した地域未来創生センターフォーラム「市民協業時代における大学的フィールドワークの可能性」で、研究メンバー以外にも共有することができた。このフォーラムではゲストとして、科学研究費補助金（基盤研究B）「ソーシャルデザインの人類学的研究：生活・地域・人をどう生み出すか」の研究代表である木村周平氏（筑波大学人文社会系准教授）と研究メンバーである内藤直樹氏（徳島大学総合科学部准教授）を招聘した。木村氏を中心とする研究グループはフィールドワークを企業活動などのなかで活用していく方途を検討しており、それらの研究成果とのコラボレーションとして、フォーラムを開催することができた。

フォーラムでは弘前大学の辻本侑生、近藤史、葉山茂と徳島大学総合科学部の内藤直樹氏が報告を行い、筑波大学人文社会系の木村周平氏と弘前大学の白石壮一郎がコメントをし、総合討論では弘前大学の

高橋憲人が司会を務めた。各パネリストの報告は以下の通りである。

辻本侑生 「学術的フィールドワークと、実務的フィールドワークのあいだを考える」

近藤 史 「津軽塗に創造の余地を取り戻す - 塗師・大学・地方公設試験研究機関の協働の試み」

葉山 茂 「地域とコミュニケーションする博物館展示をめざした結果：大学と行政と地域が協働して継続的なフィールドワークの場をつくる」

内藤直樹 「四国の山村でフィールドワークをしていたら、国連 FAO @ローマにいた件：基礎自治体〈職員〉のニーズに応える研究の展開」

(2) 学史的側面の検討

この観点は、フィールドワークという研究手法がどのような思想的、学術的要求のもとで発展してきたのかを検討することを目的としている。多くの研究でフィールドワークという手法が選択される一方で、その初発の問いがどのようなものであったのかを検討してみようというのが、この観点である。

本年度これまでに、林彦櫻による聞き取り調査が行なわれている。林彦櫻は2023年11月13日14:30～15:30に日本経営史学会元会長、東京大学名誉教授、一橋大学名誉教授、現国際大学学長の橘川武郎氏に対してインタビューを実施した。

橘川氏は、日本経営史学の大家として知られており、多数の経営史の大著を出版しているとともに、応用経営史やオーラルヒストリーの活用等、経営史学における新しい方法論を多く提起している。

インタビューの内容は、氏の研究の問題意識と方法、経営史学における資料調査とインタビュー調査、オーラルヒストリーの方法と経験談、今後の経営史学に対する展望と意見等から構成された。氏はとくに歴史研究としても、現場での調査やインタビュー調査の意義を強調し、フィールドワークが経営史学に対しても非常に重要であることを語った。

(3) 今後の予定

上記の議論を踏まえ、1月と2月で2回の研究会を開催した上で、最新の研究成果とフォーラム記録を掲載するブックレット『フィールドワークという探索活動の可能性2』を作成する予定である。また「学史的側面の検討」についても、事例を増やしたいと考えている。

3 おわりに

フィールドワークに関するこの共同研究は、当初はコロナ禍のなかでの視点整理を主たる目的としてきた。しかし議論の深化とともに、今年度からのプロジェクトのなかで、フィールドワークの現代的な側面としての住民や行政、企業との協働やフィールドワークという手法を取り入れるに至った初発の問いに関する議論へと深まりつつある。

現在、このプロジェクトは研究を主としているが、当初の目論見はフィールドワークをする学生に向けた教科書づくりをすることである。来年度以降、さらに地域との双方向性のフィールドワークのあり方を模索するとともに、フィールドワークという活動の特性を明らかにしつつ、教育の面での貢献も模索していきたいと考えている。

弘前大学人文社会科学部
令和5年度 地域未来創生センターフォーラム

参加
無料

申込
不要

当日参加可能

市民協業時代における 大学的フィールドワークの 可能性

さまざまな立場の人びとが
ともに学び、新しい実践を
つくっていくことを求められ
ている現代に、大学的な問
題発見型フィールドワークを
活かす方法を考えます。

令和5年
12月16日(土) 13:00-17:45

会場 弘前大学人文社会科学部 多目的ホール

〒036-8560 弘前市文京町1 弘前大学人文社会科学部棟 4階

お問合せ 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
青森県弘前市文京町1

TEL 0172-39-3198 (平日 10:15-17:00)

E-mail irrc@hirosaki-u.ac.jp

対象 一般・行政関係者・学生・高校生 (120名)

主催：弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター

地域未来創生プロジェクト

「地域研究の手段としてのフィールドワークの意義に関する多分野横断的検討」

後援：弘前市・東奥日報社・陸奥新報社



弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター
Innovative Regional Research Center

市民協業時代における大学的フィールドワークの可能性

近年、フィールドワークは社会のなかで広く認知され、多くの場所で活用されるようになってきています。一方で、行政や企業などが求めるフィールドワークと大学が求めるフィールドワークの間には観点、得たい結果、手法の点で顕著な違いがみられます。

この両者の違いを確認し、大学のフィールドワーク、人類学とその近接領域を例に大学と地域コミュニティとの関わり方の諸相を概観して、市民協業時代における大学のフィールドワークの可能性を検討します。お気軽にお越しいただき、議論にご参加下さい。

プログラム

12:30	開場	
13:00-13:10	挨拶—飯島 裕胤 (弘前大学人文社会科学部長)	
13:10-13:20	趣旨説明—葉山 茂 (弘前大学人文社会科学部・准教授)	
13:20-13:55	辻本 侑生 (弘前大学地域創生本部・助教)	学術的フィールドワークと、実務的フィールドワークのあいだを考える
13:55-14:30	近藤 史 (弘前大学人文社会科学部・准教授)	津軽塗に創造の余地を取り戻す—塗師・大学・地方公設試験研究機関の協働の試み
14:30-14:45	休憩	
14:45-15:20	葉山 茂 (弘前大学人文社会科学部・准教授)	地域とコミュニケーションする博物館展示をめざした結果：大学と行政と地域が協働して継続的なフィールドワークの場をつくる
15:20-15:55	内藤 直樹 (徳島大学総合科学部・准教授)	四国の山村でフィールドワークしてたら、国連 FAO@ローマにいた件：基礎自治体<職員>のニーズに応える研究の展開
15:55-16:10	休憩	
16:10-16:25	コメント 1	木村 周平 (筑波大学人文社会系・准教授)
16:25-16:40	コメント 2	白石 壮一郎 (弘前大学人文社会科学部・准教授)
16:40-17:40	総合討論 司会 パネリスト	高橋 憲人 (弘前大学教育学部附属ウェルビーイング研究センター・助教) 木村 周平 (筑波大学人文社会系・准教授) 白石 壮一郎 (弘前大学人文社会科学部・准教授) 辻本 侑生 (弘前大学地域創生本部・助教) 近藤 史 (弘前大学人文社会科学部・准教授) 葉山 茂 (弘前大学人文社会科学部・准教授) 内藤 直樹 (徳島大学総合科学部・准教授)
17:40-17:45	主催者挨拶・閉会	
総合司会	佐々木あすか (弘前大学人文社会科学部・助教)	

【協力】

科学研究費補助金 基盤研究 (B) ソーシャルデザインの人類学的研究：生活・地域・人をどう生み出すか (課題番号 21H00641) 代表：木村 周平

科学研究費補助金 基盤研究 (B) 富の体現、再配分政治に対する実践とアセンブリ形成：アフリカ都市中間層ボトムの研究 (課題番号 22H03833) 代表：白石 壮一郎

科学研究費補助金 基盤研究 (C) 職人と地方公設試験研究機関の関係史から構想する津軽塗の多様性の復権と技術継承 (課題番号 22K01089) 代表：近藤 史

科学研究費補助金 基盤研究 (C) 漁業者のライフヒストリーにみる地域居住継続の要因 (課題番号 21K01075) 代表：葉山 茂